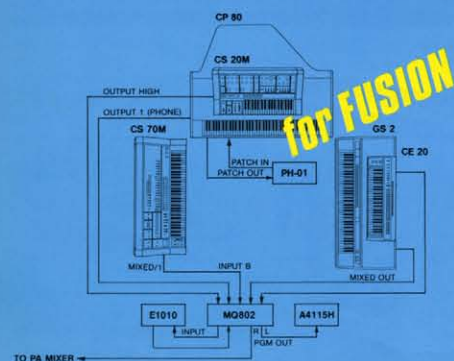
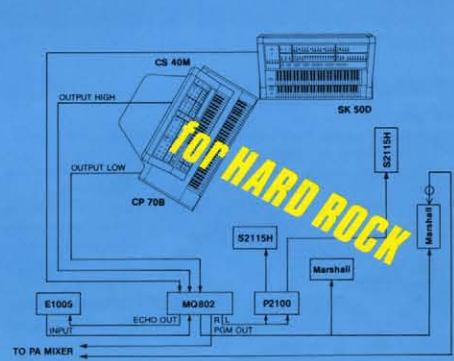


キーボーダーが「組む」という発想を身につけた。

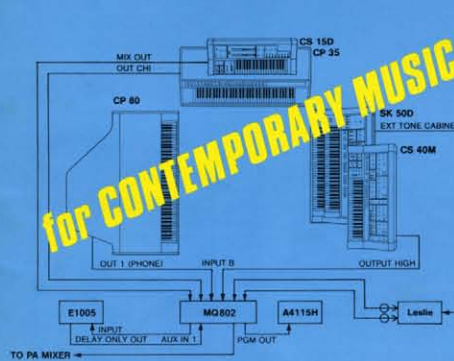
キーボードは、何台かを組み合わせることで自由に発展させられる楽器です。個性の異なるモデルを2台、3台と追加し演奏表現に奥行きをもとめる。またはメンバーにもうひとりのキーボーダーを加え、バンドのなかでのアンサンブルを楽しむ。——全体のサウンドに厚みができるはもちろん、弾きなれた曲に、より高度なアレンジを加えることも可能になります。ヤマハのコンボキーボードは全7シリーズ。それぞれに、世界のトッププロに照準を合わせたものから、基本性能に重きを置いたシンプルな機種まで充実した商品ヴァリエーションを誇っています。しかもすべてに、クラリティの高い音づくりをしているため、自由に組み合わせ、オリジナルなキーボードシステムをつくるのが可能です。ここに紹介するのは、その一例。音楽の傾向別に5つのシステムを組んでみました。あなた自身のシステムづくりに、ぜひお役立てください。



すべてのキーボードを、リード楽器としてプレイできるような考えたセッティング。中心は、ハイテクを存分にふるえるGS-2、CP-80、CS-70M、タイプの異なる3種類のポリフォニックキーボード。プリセットタイプのキーボードとして、コンボアンサンブルOE-20および、プログラマブルタイプのシンセサイザーCS-20Mを使用。エキサイティングなソロプレイにも充分に対応する。エレクトリックランドCP-80には、ピアノのサウンドによくマッチするエフェクター、フェイザーを接続。すべてMQ-802でミキシング。一方はPA、一方はA-4115Hでモニター。

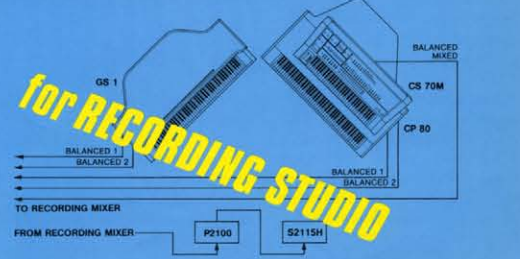


ヘヴィなサウンドとエキサイティングなプレイのために、極力シンプルにまとめたセッアップ。オルガン系音にはディストーションどりの迫力あるサウンドをもとめ、マッシュアップからマイクとり、MQ-802からミキサーへ。ピアノ、シンセサイザー系音についてはMQ-802からパワーアンプP-2100へ送り、S-2115Hを通してモニター。SK-500はオルガン系音を主に用い、重厚なリード、CP-70Bは、アタックを効かせロックンロールピアノとして。CS-40Mはスローな曲で、感情的なシンセサイザープレイに使用。それぞれのサウンド特性をうまく引き出す。



テーマフレーズ、オブリガート、コードワークなどビッキングを主体に考えながら、多彩な表現能力をもとめた。キーボード台数が多いため、MQ-802を使い、各キーボード間のバランス調整および音質を補正。一方はPAへ、一方はA-4115Hに送りモニターするシステム。ロータリーアンプ(レスリー)はSK-500によってコントロール、(レスリー)に通した音をマイクとり、MQ-802へ送る。ビッキングのサウンドに力を入れ、アコースティックな音色のCP-80と、ソリッドなサウンドのCP-35、2台のエレピを用意。リードはCS-150、SK-500のソロシンセ。

ニューウェーブのシャッキングなサウンド。過激なフレーズ。無機的なリフをフルに表現するためのキーボードシステム。メインキーボードは当然CS-70M。ソロプレイにさらにシャープな響きをもたせるため、エフェクターとしてディストーションを接続。またポリフォニックシーケンサーを活用し、ニューウェーブ特有のリビートプレイを展開。SK-30は主にオルガンとして、CP-25はもちろんエレピとしてビッキングに使用。ただしときには、SK-30のストリングトーンによるソロ効果的、モニターは4チャンネルまでのミキシングが可能なキーボードアンプ、KS-100を使用。



ワンパートずつ録音して、レコーディングの現場を想定したセッティング。使用しているキーボードはそれぞれ最大限の機能を誇る。3台のポリフォニックタイプ、GS-1はそのサチュレーションでダイナミックなサウンドをそのまま生かす。CS-70Mは演奏する曲に合わせたオリジナルサウンド、CP-80は当然グランドピアノの音をもとめる。サウンドのクラリティをたいせつにするため、アウトはすべてノイズの少ないバランスタイプXLRコネクタを使用。エフェクター類はキーボード周辺には用いずに、ミキシングブースのなかでコントロールしてもらうほうがベター。